

## 横田RAWS、モバイルナビを復旧し、太平洋空軍のACEコンセプトを牽引 *Yokota RAWs revive mobile navigation aid, drive PACAF's airfield ACE concept*

December 9, 2020

By Staff Sgt. Taylor A. Workman  
374th Airlift Wing Public Affairs

横田基地第374運用支援中隊の空兵で構成する少チームは、故障した電子機器を始めとし、太平洋空軍の分散運用による機敏な戦闘展開(ACE)のコンセプトの発展を牽引している。

横田のレーダー、飛行場、気象システム(RAWS)部門は、航空機が太平洋に点在する着陸ゾーンに安全に到達できるようにするモバイル戦術航法装置(TACAN)システムの改修を行った。

「このモバイル戦術航法装置システムは、太平洋空軍のACE戦略を直に可能にし、航空機を小規模の場所に分散させることで、敵の攻撃があった場合に、部隊がより柔軟で迅速な対応ができるようにする」と第374運用支援中隊飛行場運用小隊運用担当官アーリー・チャーチ大尉は述べた。

空軍のTRN-41モバイル戦術航空航法装置システムは、およそ1年ほど前から退役が始まっていた。通信機器は約450万ドルだった。RAWチームは、代わりに新しい電源装置を開発し、戦術航空航法装置の消滅の危機から救った。

持ち運び可能な戦術航法装置アンテナは、軍用機に信号を送り、着陸ゾーンに安全に誘導する。

「沖合の灯台のようなもので、しかも電磁式だ。航空機に着陸地点の識別情報、ビーコンからの方向、地点からの距離を送信し、航空機が安全かつ正確に航行できるようにする」と第374運用支援中隊RAWS主任のドワイト・レーム曹長は説明する。

TRN-41は、他の戦術航法装置とは異なり、1時間以内にセットアップできるよう、梱包して航空機に搭載し、着陸地点まで手で運ぶことができるよう小型化されている特徴がある。

「この装置は迅速な展開を可能にする。セットアップに多くの時間と労力が掛かる巨大なシステムに代わる、地上通信のための移動用セットだ。これらが備蓄としてあることで、ACEの能力を多様化できる画期的なツールだ」とレーム曹長は述べた。

「持ち運びできる機器は、前方展開の場所には理想的だが、このモバイルユニットは多くの点で寿命を迎えていた」とレーム軍曹は言う。

「一番の問題は、ガソリンを直流電力に変換する非常に古い発電機を使っていることだ。同じ出力の発電機はもう製造されていないし、このモデルの部品ももう製造されていない」とレーム曹長は語った。

レーム曹長とRAWSチームは、半年に渡って産業用機器を調査し、設計図を作成し、電源装置を完全に再設計した。それには最終的に約1500ドルが費やされた。

「バグダッド入りした時は砂漠で、常に必要な装備があった訳ではなかった。そこでは、作動させるために手元にあるものを使って必要に応じてやりくりしなくてはならない。戦闘地域で、機能することが大事だ」とレーム曹長は述べた。

RAWSチームは、昨年軍事演習「レッドフラッグ」を支援し、アラスカ州アダックの離島に完成した装置を配備する前に、横田でテストを行った。このモバイル戦術航法装置は、最初の1ヵ月で、戦闘機の迂回の必要を軽減し、600万ドルの燃料費を節約し、今年もアラスカのアダック島での支援を要請されるほどの成功を収めた。

横田のRAWSの取り組みの結果、空軍はTRN-41のデポレベルでの支援を再開することを決め、現在はACEの支援のために、モバ



イル戦術航法装置を改修して空軍全体の部隊に再配布している。

「横田RAWSは、空軍全体のベンチマークとなったシステムを再び使用できるようにするための技術的な解決策を開発した。同部門は、太平洋空軍内の人員を訓練し、システムの運用と配備を行い、インド太平洋地域での運用能力を拡大するのに一翼を担っている」とチャーチ大尉は述べた。

太平洋空軍は、横田を航空機の着陸ゾーンを迅速に確立できる、小規模な展開可能なチームを育てるための「パイロットユニット」として指定した。RAWSは現在、太平洋空軍、そして将来空軍全体で採用されるであろう訓練、機器、およびコンセプトを確立している。

横田のRAWSチームはこれまで、航空宇宙計器飛行の芸術と科学への最も重要な貢献に対して贈られる、空軍の2019年「ジョセフ・B・ダックワース大佐賞」と、トップRAWSチームに対して贈られる太平洋空軍の「2020年リマサイト85賞」を受賞した。